

今日、聖書学は解釈学から多大の影響を受けているが、しばしば、このよつたな現象のことが「パラダイム・シフト」と呼ばれる。<sup>1)</sup> 本稿では、そのよつたな「パラダイム・シフト」の結果、従来の聖書学が晒されている重大な挑戦の一部を垣間見、福音派の視点から批判を試みたい。従来、聖書学では、歴史的な視点がかなり強調された。一言で「歴史的視点」と言っても大きく二つに分けることができる。一つは、共時的な意味での歴史的視点である。近代の聖書学が、教会の伝統的な教え（神学）に対抗する形で、より「合理的に客観的に」聖書を研究する視点として当初念頭に置いていたものと言つていいことができる。つまり、聖書が書かれた時代のコンテキストで聖書の特定のテクストを

## はじめに

# テクスト、意味そして読者 解釈学からの挑戦

伊藤 明生

理解しようとすることを追求する、ことである。別の表現で言えば、適用をも含めた解釈に対する意義、つまりテクストの著者（ここでは人間の著者のこと）の意味を見い出すことに他ならない。もう一つは、そのような近代の聖書学確立の延長線上にあるとも言えるが、より分析的に聖書のテクストを読み、解釈することを目指し、聖書のテクストの成立の歴史を復元しようとする。<sup>1)</sup>の場合には同じ歴史的とは言つても、通時的な意味での歴史的と言える。つまり、聖書のテクストの成立の歴史が主要な関心事となり、具体的には「五書緒論問題」「共観福音書問題」「資料批判」「様式史」「編集史」などの課題・方法論を例として挙げることができよう。

さて、聖書学外の様々な専門分野で開発され、用いられてきた方法論を聖書テクストにも適用することを近年の「パラダイム・シフト」と呼ぶことができる。<sup>3)</sup> 文学批評を取り上げられてきた様々な方法論が特に顕著であり、さらには、その背後には様々な哲学的考察、哲学的立場が見え隠れする。具体的な名称だけを列挙すれば、修辞（学）的批評、読者応答批評、ナラティヴ批評、記号論、構造主義、ポスト構造主義・脱構築、フェミニスト批評、解放の神学（あるいはイデオロギー批評）などである。個々の方法論には個々の方法論の前提と問題点などを挙げることができが、ここではより一般的な「パラダイム・シフト」全般で取り沙汰されるようなことに焦点を絞りたい。一言で言えば、「意味」の問題である。意味とは何か、どこにあるのか、ある特定のテクストの意味を決めるのは誰か、といったことである。ポスト構造主義・脱構築では、かなり明確に明される。それに対して、例えば、読者応答批評や修辞（学）的批評では、様々な立場から、方法論を利用することができます。「ポストモダン・バイブル」<sup>4)</sup>なる書物では、「パラダイム・シフト」以降の聖書学の方法論が様々に取り扱われ、論じられているが、全体で一貫した著者たちの立場を見い出すのは比較的容易なことである。つまり、聖書は様々な視点から様々に読めるし、読まなければならぬ、との主張が一貫して根底に流れている。意味と言つるのは、著者がテクストを執筆する際に、伝えようとした

意味が絶対ではなく、ある意味では読者が読みたいように読むことが許されているし、読みたいように読まなければならぬ、と。<sup>5)</sup> もはやテクストと言つものは客観的には存在しない、読者が読んで初めてテクストは存在するようになる。即ち、テクストの意味とはテクストを書いた著者の意図ではなく、読者がテクストから作り出すものであるとさえ主張される。明らかに、このような主張は伝統的な聖書学に挑戦状を突き付けるだけではなく、福音主義神学・信仰に危機感を与えるものと言つていいだろう。

このような背景を踏まえて、本稿では、意味の意味について、とりわけ意味は著者に属するものか、テクストに属するものか、読者に属するものかを考察したい。もちろん、伝統的な聖書学では、テクストに見い出される著者の意味が追求されたにも拘わらず、近年の「パラダイム・シフト」以降は、読者がいわば共同著者として意味の創造者である、と主張されている。先ず、そのような立場の先駆けとなつたカント哲学における認識論に触れ、それから、文学的理由に触れた上で、ジャック・デリダとローラン・バルトが中心となるポスト構造主義・脱構築を垣間見たいと思つ。そして、最後にテクストにこそ意味があり、解釈の目指すものはテクストに見られる著者の意味であると言つ立場を福音派の聖書論も踏まえて、論じたいと思つ。

## 1 哲学的背景

難解なことでも有名なインマヌエル・カント（一七一四年～一八〇四年）の哲学をじっくり論じるつもりもない。そのようなことは、筆者の技量を越えるのみならず、必要以上に本稿の議論を複雑にしかねない。ただ読者を共同著者と見るような発想を辿ると、カントの認識論まで遡ることができよう。<sup>6)</sup> カントによると、私たちはこの世界そのも

のを見て知つてゐるのではなく、「現象世界」のみを知つてゐるとする。上記でのポイントは、私たち人間は世界をあるがままに見てゐるのではない、生まれながらにして、いわば色眼鏡を身に付けていて、色眼鏡なしにあるがままの世界を見ることができない、といつものである。文字通りの色眼鏡であれば、取り外しが自由であり、色眼鏡を外してみれば、実際のあるがまゝの世界を見、知ることができる。しかし、私たち人間は生まれながらにして色眼鏡を身に付けていて、その色眼鏡は取り外しができない。したがつて、直接、世界を認識する」とは私たちにはできなく、人それぞれの色眼鏡によって、同じ世界も異なる世界として認識される、とカントは述べ。

カントの論述を端的に表現する一節を引用すると「するといふにまた問題が生じる、即ち～我々が何か或るものを見直し得るための条件ではないにせよ、しかしこれを対象一般として思惟し得るための唯一の条件としてのア・プリオリな概念もあるのではないか、そしていのよつた概念も経験に先だって存在するのではあるまいか、といふ問題である。もしかかる概念が存在するとしたば、対象の経験的認識はすべてこれの概念と必然的に合致するわけである、かかる概念を前提しなければ、何ひとつ経験の対象になり得ないからである。」<sup>7)</sup>つまり、私たちが通常客観的なものであると想定している空間、時間といったものも実は物自体の規定ではなく、主観的なものと結論付けている。まさに「コペルニクス的転回」とも呼ぶべきものである。カントによれば、私たちは物自体、「可想（英知）界（mundus intelligibilis）」を認識できない、「現象界（mundus phaenomenon）」、「感覚界（mundus sensibilis）」しか認識できない。認識論的にものは「可想的存在（noumenon）」と「現象的存在（phaenomenon）」とに分けられる、とする。逆に言えば、私たち人間の理性は絶対ではなく、物自体を客観的に見て知ることはできない。既にピルト・インセレたカト「ワーリーによって私たちは世界を把握しようと/or/。これをカントは「悟性（理性）のカト「ワーリー」と呼ぶ。換言するど、カントは哲学の方法論と自然科学の方法論とを峻別した。これは眞理としては画期的ないとであった。

自然科学の領域では客観的な探究・研究がなされるのに對して、哲学などの領域では必然的に主観的になる、と。カント哲学の影響はただちに神学の領域では認められたが、聖書学の領域にも見られるようにならなければ暫くの時が必要であった。

本稿の論題に関連するカント以降の哲学者は々々こる（例えば、ハイデッガー）が、上記では繰り返すことは放棄して一挙にガダマーまで跳ぶことにす。<sup>8)</sup>ハンス・ゲオルク・ガダマー（Hans-Georg Gadamer, 1900～）<sup>10)</sup>の主著の題は『真理と方法（Wahrheit und Methode [Tübingen: J. C. B. Mohr, 1990, 初版は一九六〇年]』であるが、彼ほど解釈学が方法論に「墮する」ことを戒めいた解釈学者も珍しい。『真理と方法』の第一部で芸術の体験と真理との関係に関する全問題を扱つてゐる。彼の解釈学理論は、しばしば芸術との類比で論じられる。演劇は上演されて初めて演劇として存在し、芸術は鑑賞されて初めて存在し、祭りも祭りが祝われて初めて存在する、と言える、と。ガダマーリー解釈学の核心部分は以下のよのなものである。読者には「先行判断（Vorurteil）」があり、その先行判断を伴つてテクストに接する、と。テクストの地平と読者の地平、あるいは過去の地平と現在の地平とが「融合（Verschmelzung）」する時にこそ理解が成り立つ、と（著者の）意味が既に（客観的に）テクストに存在してゐるところではない、読者として伝統（＝伝承）によるテクストの意味に貢献する余地を明白にガダマーは認める。ナレド、テクスト解釈の歴史である「影響史（Wirkungsgeschichte）」が解釈において重要なものとなる。

ガダマー自身の言葉を以下に紹介する。<sup>11)</sup>「時間的隔たりを完璧にする濾過過程の否定的側面と共に、同時に理解のために役立つ肯定的側面もある。それは特殊な性質の、制限された先行判断を死に絶えさせるだけではなく、眞の理解を導くよのな先行判断をそれとして現れさせむ。しばしば、このよのな時間的隔てが、解釈学の本質的に批評的問いを解決する」とがである。即ち、私たちが理解する非立派となる『眞の』先行判断を、私たちが

『誤解する』手立てとなる『誤った』先行判断から区別する』ことである。やじで、解釈学的訓練を受けた知性は歴史的意識を包含する。やじで、理解を導く歴史の先行判断を意識し、伝統（／伝承）を他者の見解として取り分け、評価する』ことである。（三〇二一～三〇四頁）「歴史的意識を伴つて起る、伝統（／伝承）とのすべての出来事には、テクストと現在との間の緊張関係が体験される。解釈学の課題は、緊張を安易に取り除く』ことではなく、意識的に開示する』ことである。（三一一页）

## 2 文学的な理由

文学批評の歴史は、「著者の時代」、「テクストの時代」、「読者の時代」と時代区分する』ことができる。<sup>12)</sup> 伝統的には、著者がテクストの意味の創始者であり、テクストの意味とは当然のこととして著者の意味と理解された。文学批評の領域では、「印象批評」などと呼ばれるものでは著者の意味が探究の対象とされ、「著者の時代」と呼ぶ』ことがであります。聖書学の領域では、宗教改革者たちが著者（人間の聖書記者および神）の意図に関する関心に特徴付けられる聖書解釈を創始した、と言える。そのような著者志向の解釈学を古典的に展開したのがフリードリッヒ・ショライヘルマツハ（一七六八～一八三四年）である。彼の背景には、敬虔主義、ロマン主義、啓蒙思想、先駆者たちの解釈学的努力を挙げる』ことができる。著者中心の解釈学と言つ意味では、ロマン主義の影響が色濃く出て『る。著者を中心的に分析して、著者自身以上によりよく著者の意味を理解することをを目指すのが、シュライヘルマツハの解釈学である。<sup>13)</sup>

テクスト中心の解釈学には、文学では新批評（new criticism）、より広い領域では記号論・構造主義と言つ方法論がある。

有名である。基本的には誰がいつどのような状況で、このテクストを書いたか、と言つ種類の問いを一切無視する。テクスト外の情報を一切「括弧にくくつて」著者が残したテクストに集中し、テクストを一つの完結した体系と看做して、取り組み理解することをを目指す。とりわけ、構造主義では、二項対立をテクスト内に見い出し、それを分析する』ことが重要な部分を占める。

読者中心の批評は、受容理論（reception theory）、読者応答批評（reader-response criticism）などと呼ばれる。ローマン・インガルデンの知覚理論などに基づくウォルフガンク・イーゼル、ウエイン・ブースなどの批評理論である。<sup>14)</sup> 意味生成における読者の役割を、より積極的に評価するアプローチである。アナロジーで表現すれば、同じ夜の星空を見ていても、ある人は星を結び合わせて「鍵」の形を見るが、別の人には「杓」の形を見い出す。<sup>15)</sup> 星空には星と星を結びあわせる線は引かれていない訳で、見ている人間がその線を補つて『いる。テクストを読み、解釈し、理解する上でも同様なことが起る。テクストには必ずしも明白でない』ことがあり、読者は想像力を働かせ、無意識のうちに曖昧なテクストを明瞭にしてテクストにないものを補つて『いる。

イーゼル、ブースとは異なり、より過激なスタンリー・フィッシュのよの立場もある。<sup>16)</sup> フィッシュによると、意味は読者が作り出すものであるが、読者自身も決して自由な存在ではなく、読者共同体の規範の枠組みの中で意味を生成すると主張される。つまり、フィッシュにとっては、テクストには意味はない。それどころか、テクストそのものも客観的には存在しない、とさえ主張する。そこで、テクストの解釈を評価する普遍的規準は存在しない。ただ特定の読者共同体内では、特定の解釈を「正しい」か「正しくない」かを評価する規準があることを認めるが、それは決して普遍的なものではない、とする。

「意味」といふものを考へると、著者、テクスト、読者がそれぞれの形で「意味」に貢献している、と言える。如

何なるテクストであっても、著者自身が自分はいつこつ意味で書いた、と語る著者の意図がすべてとは必ずしも言えない。意味の伝達の手段としてのテクストの果たす役割を無視する訳には行かない。現実問題として聖書を読む場合には著者にいちいち意味を確認するとはできない。それだけではなく、著者が（想定される）読者に「意味」を伝達するために、ある種のルールを守るのが普通である。つまり基本的なコリニー・ケーションのルールと言つものが存在する、と言つていいだろ。換言すると、読者は自らの想像力を逞しく用い、あるいは勝手に自由気假に読む」とは勿論できるが、著者は（想定される）読者とある種のコリニー・ケーションのルールを分かち合っている、と前提していると想えられる。文学の三つの「時代」を見られるように、テクストの「意味」に著者もテクストも読者も貢献していくが、三者の果たす役割は微妙に密接に絡み合つてこゝとは容易には否定できない。

### 3 ポスト構造主義・脱構築 テリダ・バルトのテクスト理解

スイスの言語学者、近代言語学の父として知られるフェルディナント・デ・ソース（Ferdinand de Saussure）－八五七～一九一四）の『一般言語学講義（*Cours de Linguistique Générale*）』（一九一六年）が通常、記号論の出発点とされる。それまでの言語学は言語を通時的に比較研究するのに専念していたが、ソシユールは言語を共時的に研究する道備えをし、特定の時代の特定の言語を一個の記号体系として理解しようとした。例えば、日本語で猫のことを「ネコ」と呼ぶが、日本語の「ネコ」それ自体に猫と並んで意味があるのではなく、意味「猫」と単語「ネコ」との関係には論理的必然性はない、恣意的である。尚、ここで「意味」と「指示対象」とを区別する」ことは重要である。「ネコ」の指示対象とは現実世界に実在する猫といつ動物のことをさむ。「猫」と「ネコ」とを結び付けてこゝのは、くとも一見）可能にあることにある。

日本語使用者間での合意といつ慣習以外の何ものでもない。むしろ問題は「ネコ」と「イヌ」、あるいは「ネコ」と「トド」との差異に注目すべきである。換言すると、ソシユールによると、「ネコ」とか「イヌ」とか「トド」という言語構成要素（勿論、単語以外にも沢山の要素がある）を一個の記号と看做すのである。そして、そのような記号の総体を言語と理解したのである。そして、このよつたな発想は言語に留まらないことで、およそ知的探究の対象となるあらゆる分野に応用することができる考え方であった。例えば、文化人類学者クロード・レヴィ・ストロースの『構造人類学』は有名である。とりわけフランスの知識人たちの間で、二十世紀前半、この記号論・構造主義が非常に多くのはやされた。このよつたな物の考え方の利点は、文学など主観的な判断が大勢を占める領域で「科学的」分析を（少なくとも一見）可能にすることにある。

構造主義を更に論理的に押し進めたのがポスト構造主義・脱構築である。記号論・構造主義では、記号体系内の記号と記号との相互関係で各自の記号の価値が定まってくる（ちよつじのエス盤のよつて）。そして、その相互関係とは、どちらもおさず差異に他ならない。その「差異」といつ鍵概念を体系そのものに当てはめてしまつところからポスト構造主義などと呼ばれるものが現れてくる。そのよつたな視点からすると、テクストとは「痕跡」の果てしない連続となり、比喩的には「底なしのエス盤」と呼ぶことができる。<sup>17)</sup> ポスト構造主義・脱構築のテクスト理解を知る上でジャック・デリダとローラン・バルトは重要なである。<sup>18)</sup>

「神の死」（「一チニ）が叫ばれて久しいが、全知全能で創造者である神の存在を否定するのであれば、「著者の死」<sup>19)</sup> を宣告するのは、それほど懸け離れた発想ではない。神と被造世界との関係は、いわば著者とテクストとの関係に非常に類似している。西洋の哲学の歴史では、常に超越的 existence を前提として、その超越的存在的視点から、事物に意味付けがなされてきた。ところが、そのよつたものは「ロバスト中心主義」である、とデリダは否定しがたいとする。伝

統的には著者はテクストに対しても全知全能であったが、そのような「神話」が崩れ去つたと言える。トリダは「署名の不在」と書く表現を使つたが、要はテクストはもはや著者から完全に独立し、自由な存在で、一人歩きをしていざるんですね。<sup>20)</sup> 同じテクスト（＝単語／記号）が異なるコンテクスト（文化脈）で反復可能である（英訳では名詞iterabilityと形容詞 iterableと書く語が用いられる）<sup>21)</sup>。と。換言するに、先程のソシュールの言語学（記号論）の説明で触れた「指示対象」<sup>19)</sup>が現実世界が完全に排除された状況である。コンテクストが異なれば、テクストの意味は同じでなくなるので、テクストの意味は常に新たに創造され、異なる意味が生成される事になる。「テクストの外には何もない」（Il n'y a pas de hors-texte）<sup>22)</sup>。このトリダの言葉はしばしば引用され、しばしば誤解されますが、別にトリダはテクストの外に現実世界があることを否定している訳ではない。それではなく、すべてのものが意味を持つとする記号体系の一部であると言ひながらトリダのポイントである。やはり一つのトリダの鍵となる表現は「遅延（différance）」である。

より具体的にテクストにポスト構造主義・脱構築的にアプローチするのであれば、そのテクストを記号体系として見た場合に見に出される記号体系の綻び・穴に注目する事になる。脱構築は常識の否定をも伴つ。脱構築の視点からいざ、もはや解釈ではなく、テクストとの戯れしかない。そして、テクストと注解との区別は否定される。これは実はヨハネたちの（旧約）聖書解釈と非常に類似している。

#### 4 意味はテクストにあるか

ポスト構造主義・脱構築に果敢に批判を加える哲学者がいない訳ではない。例えば、ポール・リクール、ウンベル

ト・エーヴ<sup>23)</sup>などは、意味の相対主義・虚無主義（nihilism）に明確に反旗を翻している。両者は、「著者の意図」（なかなか見い出すことが困難で、しばしば解釈者には無関係）、「読者／解釈者の意図」（意のままにテクストを読み取る）の代わりに、「テクストの意図」を解釈の目指すものとして提唱する（リクールの表現は「テクストの世界」である）。「テクストの意図」とは、少々不可解な表現ではあるが、エーヴは、テクストの権利と解釈者の権利との弁証法を研究し、解釈者の権利が過度に強調されてきた、と理解している。要は、「テクストの意図」に反する解釈は過度の解釈である、とエーヴは書く。テクストの意味をただ一つであるとは論じないが、正しい解釈と正しくない解釈との区別をする規準があると言はば、非常に参考になると思われる。

余りにも伝統的な発想かもしれないが、福音派の信仰・神学を前提に考察するならば、聖書のテクストを解釈するとなれば、やはり第一義的には、著者の意味を見い出すことが目的になるであらう。福音派の神学では、当然のことながら、天地万物を創造し、すべてのものの価値觀の基盤となる方である神の存在を認める。全知全能の創造神とのアナロジーから、テクストの著者の存在、そして著者の意図する意味が一義的に重要であることは肯定することに余り問題はなくなつてくる。私、私ができるものではない。神のみことばとしての聖書は、神が人と契約を結ぶためのヨハネーションに他ならない。明らかに、ヨハネでは脱構築の解釈理論と議論の余地は余りない。議論は平行線を辿るを得ないである。

確かに聖書のテクストに寄観的に意味があると主張するのは余りにもナイーヴであろう。ちょっと窓の外に見える街路樹が現実世界に存在すると同じように、テクストに意味があり、テクストそのものを読めば、樹木を手で触れることができるよう容易にだれもがテクストの意味を手に入れるとは考へ難い。むしろ完全な不可知論的相対主義か絶対的知識かの一着択一から私たちは自由にならねばならない。私たち福音派は、聖書は誤りなき神のみことばであ

り、私たちの生活の全領域の規範であると想む。しかし、私たちがこの告白を根拠にして、唯一絶対の正しい聖書の意味／解釈が私たちにはあると想めるのは大きな間違いである。せこせい私たちが主張する以上、十分に妥当な意味を聖書のテクストから読み取れることができると想つことである。完全な解釈などは、上の地上に終末以前にはあり得ない」とは認めざるを得ない。とは云ふべく、不可知論の绝望に陥ることもな。

ところで、「著者の意味」もしくは「著者の意図」とは、決して心理学的分析を伴うものではない（例えば、浪漫主義の影響を強く受けたフローラ・コッヒ・シコライエルマツハなどは心理学的な意味での「著者の意味」を追求した）。むしろ行動哲學や近代言語哲學の領域での成果を大いに参考としたものである。ルトヴィッヒ・ガイトイゲン（一八九九～一九五一年）、レ・オーストイゲン（一九一一～六〇年）などの言語哲學者たち<sup>24)</sup>の後繼者ともいわれた John Searle の「言語行動理論（speech act theory）」<sup>25)</sup> もしくは、コルゲン・ハバマスの「アカデミックな行為理論（communicative act）」<sup>26)</sup> が、テクストに著者の意図を見出す手段とする視点である。換言すると、テクストを著者のアカデミックな行為としてテクストの意味を把握しようとする試みである。

アカデミックな理論をキリスト教神学に基いて考察する以上は、聖書を神のみじとほしむる福音派神学からすれば、聖書を神から人へのアカデミックな行為と看做す以上は、困難なことではない。しかも全能なるお方が敢えて人とアカデミックな行為をしようとする以上、そのお方が必要となることには当然のこととして人に伝達される、と考えることは突飛なこととも思われない。人間の聖書記者と読者とのアカデミックな行為を見れば、人が「神の像」に創造されたことは大前提となる。神の御姿に創造された人間同士であるからこそ、アカデミックな行為が成立し得ると想えよう。勿論、ポスト構造主義・脱構築などで指摘されるように、アカデミックな行為が成立し得ると想えよう。

アカデミックな行為を阻害する様々な要因はあり、完璧なアカデミックな行為（以心伝心）は地上に起こることは不可能である。しかしアカデミックな行為は決して不可能とは断言できない。

意味を著者の意味と規定するならば、意味と意義との区別を導入する必要が出て来る。上の区別は、言語行動理論の用語である locutionary, illocutionary (in+location), perlocutionary (per+location) を用いると非常にわかり易くなる。私たちが locutionary act を行なうとは、ある意味と対象指示を伴う、ある文を発話するなど、まさに同じである。そして、illocutionary act を行なうとは、情報を提供したり、命令したり、安心させたり、警戒したり、判決を行なったり、あるいは、つまづかる（慣習的な）拘束力を有する禁語のなどである。又して、perlocutionary act を行なうとは、質問をしたり、答えたり、納得させたり、説得したり、回避したり、驚かせたり、誤解させたり、何かを言ひじとによってもたらしたり、実現させたりするなどである。<sup>27)</sup>

### おわりに

私たちが知らないければいけないことは十分に知り得るが、完璧な理解・解釈はあり得ない、と想つのが結論である。ヴァンフーゲルゼー、一つの解釈上の大罪として奢り高ぶりと怠慢を挙げている。<sup>28)</sup> 直接の解釈そして獲得した意味のみが唯一正しこものである、と思ふのは明らかに奢り高ぶり以外の何ものでもない。他方、地上においては完璧な解釈などあり得ないから、と言つていいに加減な解釈を施すのであれば、怠慢の罪は免れ得ないであらう。福音派の危険は、聖書の無誤性を強調する余り、自らの解釈さえをも絶対視してしまうことではないだらうか。また同時に、完全な解釈はたゞ一地上においては不可能であつても、神のみじばの正しい解釈のために日夜勞苦を厭わないので福音派としてあらぐも姿である」とは想ひがちでもない。

「パリタイム・ハーネ」に最後に触及しておいたことは、「パリタイム・ハーネ」が接觸され、一般解釈学の成継を副輔朴に取つ入れるに至る問題だ。しかし、トマホークの解釈を著述した筆者とのパリティーがハドあるいは手を加えたものである。様々な形で有益な助言を下された方々に改めて、ここに感謝の意を表わしたい。筆者の発題に対する反対意見が述べられた津村俊夫氏<sup>29)</sup>が大変こじつけた所である。また、本稿執筆中に入手した K.J. Vanhoozer, *Is There a Meaning in This Text? : The Bible, The Reader, and the Morality of Literary Knowledge*, (Grand Rapids: Zondervan, 1998) は非常に興味深い。大いに役立たせてくれた。この書は100頁以上あるが、筆者も本稿の多くは短文で解決できたら大問題に筆者自身が回らなかった取扱いだ。その後、この書は A.C. Thiselton, *New Horizons in Hermeneutics: The Theory and Practice of Transforming Biblical Reading* (Grand Rapids: Zondervan, 1992) に現れる。特に本書は新約聖書における解釈論を Terry Eagleton, *Literary*

## 注

- \* 本稿は、一九九八年一月一六日（四）福音主義神学会全国研究会議（沼津）での筆者の発題「今日の解釈学」に対する手を加えたものである。様々な形で有益な助言を下された方々に改めて、ここに感謝の意を表わしたい。筆者の発題に対する反対意見が述べられた津村俊夫氏<sup>29)</sup>が大変こじつけた所である。また、本稿執筆中に入手した K.J. Vanhoozer, *Is There a Meaning in This Text? : The Bible, The Reader, and the Morality of Literary Knowledge*, (Grand Rapids: Zondervan, 1998) は非常に興味深い。大いに役立たせてくれた。この書は100頁以上あるが、筆者も本稿の多くは短文で解決できたら大問題に筆者自身が回らなかった取扱いだ。その後、この書は A.C. Thiselton, *New Horizons in Hermeneutics: The Theory and Practice of Transforming Biblical Reading* (Grand Rapids: Zondervan, 1992) に現れる。特に本書は新約聖書における解釈論を Terry Eagleton, *Literary*
- Theory: An Introduction 2nd ed.(Oxford: Blackwell/Minneapolis, MN: The University of Minnesota Press, 1996) (英語『文部省認可』訳出書)
- が現れる。
- 1) A.C. Thiselton, "New Testament Interpretation in Historical Perspective", in: J.B. Green (ed), *Hearing the New Testament* (Grand Rapids: Eerdmans, 1995), pp. 17-20.
  - 2) #基督教の歴史とその影響 (著者: 神学的解釈学の異端 試験・大卦) による解釈 (著者: 大卦とキリスト教教育) (出版社: パルタフ社) 一九九八年)
  - 3) 諸悪口のこゝれ 神学的解釈学の異端 (著者: 大卦とキリスト教教育) (出版社: パルタフ社) 一九九八年)
  - 4) The Bible and Culture Collective, *The Postmodern Bible* (New Haven and London: Yale University Press, 1995).
  - 5) ロバート・バートン・バイオニアの新約の一人ではござる。豊富な表記が Robert Morgan with John Barton, *Biblical Interpretation*, (Oxford: Oxford University Press, 1988), p. 71で示される。"Texts, like dead men and women, have no rights, no aims, no interests. They can be used in whatever way readers or interpreters choose." しかし、筆者たゞ、二軒ヤード・ロードにて燃えだす油壺 (トトコタマトベッド) が一軒の壺に欠損したのである。
  - 6) K.J. Vanhoozer, "The Reader in New Testament Interpretation" in: J.B. Green (ed), *Hearing the New Testament*, p. 302. 回憶のベストペース・ワッカコハビリテーション「現代神学」(contemporary theology) と並んで、第一回新約聖書から現代神学へと翻訳されるのが、筆者によると、難解な「純粹理性批判」がカットの翻譯譜を理屈わざの扱つ立てしなり得ない(即ち文庫なりの解説あつ)。筆者は日本文庫著『カット入門』において新書(筑摩書房一九九五年)を大いに参考した。
  - 7) カット著『篠田英雄語』純粹理性批判(上) 即ち文庫(北波書店一九八一年) - 170頁。
  - 8) 現代的な立場のものではなくて時代とともに進化する、即ち時代の立場から見ると、カットは近頃の立場に立つて、地域文化にせよ、切望せられてきたものと想定してこられる。
  - 9) ところが、興味深いことに、近年カット翁は既に自然神論の領域止まらず廣く進むるに至る。即ちカット翁の立場は、



- 24) *Limits of Interpretation* (Bloomington: Indiana University Press, 1990).  
 Ludwig Wittgenstein, trans. C.E.M. Anscombe, *Philosophical Investigations* 2nd ed. (Oxford: Blackwell, 1958); J.L. Austin, *How to Do Things with Words* 2nd ed. (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1975).
- 25) John R. Searle, *Speech Act: An Essay in the Philosophy of Language* (Cambridge: Cambridge University Press, 1969), *Intentionality: An Essay in the Philosophy of Mind* (Cambridge: Cambridge University Press, 1983).
- 26) J. Habermas, *The Theory of Communicative Action (Vol. 1): Reason and the Rationalization of Society* (Boston: Beacon, 1985)
- 27) 28) 29) 30) 31) 32) 33) 34) 35) 36) 37) 38) 39) 40) 41) 42) 43) 44) 45) 46) 47) 48) 49) 50) 51) 52) 53) 54) 55) 56) 57) 58) 59) 60) 61) 62) 63) 64) 65) 66) 67) 68) 69) 70) 71) 72) 73) 74) 75) 76) 77) 78) 79) 80) 81) 82) 83) 84) 85) 86) 87) 88) 89) 90) 91) 92) 93) 94) 95) 96) 97) 98) 99) 100) 101) 102) 103) 104) 105) 106) 107) 108) 109) 110) 111) 112) 113) 114) 115) 116) 117) 118) 119) 120) 121) 122) 123) 124) 125) 126) 127) 128) 129) 130) 131) 132) 133) 134) 135) 136) 137) 138) 139) 140) 141) 142) 143) 144) 145) 146) 147) 148) 149) 150) 151) 152) 153) 154) 155) 156) 157) 158) 159) 160) 161) 162) 163) 164) 165) 166) 167) 168) 169) 170) 171) 172) 173) 174) 175) 176) 177) 178) 179) 180) 181) 182) 183) 184) 185) 186) 187) 188) 189) 190) 191) 192) 193) 194) 195) 196) 197) 198) 199) 200) 201) 202) 203) 204) 205) 206) 207) 208) 209) 210) 211) 212) 213) 214) 215) 216) 217) 218) 219) 220) 221) 222) 223) 224) 225) 226) 227) 228) 229) 230) 231) 232) 233) 234) 235) 236) 237) 238) 239) 240) 241) 242) 243) 244) 245) 246) 247) 248) 249) 250) 251) 252) 253) 254) 255) 256) 257) 258) 259) 260) 261) 262) 263) 264) 265) 266) 267) 268) 269) 270) 271) 272) 273) 274) 275) 276) 277) 278) 279) 280) 281) 282) 283) 284) 285) 286) 287) 288) 289) 290) 291) 292) 293) 294) 295) 296) 297) 298) 299) 300) 301) 302) 303) 304) 305) 306) 307) 308) 309) 310) 311) 312) 313) 314) 315) 316) 317) 318) 319) 320) 321) 322) 323) 324) 325) 326) 327) 328) 329) 330) 331) 332) 333) 334) 335) 336) 337) 338) 339) 340) 341) 342) 343) 344) 345) 346) 347) 348) 349) 350) 351) 352) 353) 354) 355) 356) 357) 358) 359) 360) 361) 362) 363) 364) 365) 366) 367) 368) 369) 370) 371) 372) 373) 374) 375) 376) 377) 378) 379) 380) 381) 382) 383) 384) 385) 386) 387) 388) 389) 390) 391) 392) 393) 394) 395) 396) 397) 398) 399) 400) 401) 402) 403) 404) 405) 406) 407) 408) 409) 410) 411) 412) 413) 414) 415) 416) 417) 418) 419) 420) 421) 422) 423) 424) 425) 426) 427) 428) 429) 430) 431) 432) 433) 434) 435) 436) 437) 438) 439) 440) 441) 442) 443) 444) 445) 446) 447) 448) 449) 450) 451) 452) 453) 454) 455) 456) 457) 458) 459) 460) 461) 462) 463) 464) 465) 466) 467) 468) 469) 470) 471) 472) 473) 474) 475) 476) 477) 478) 479) 480) 481) 482) 483) 484) 485) 486) 487) 488) 489) 490) 491) 492) 493) 494) 495) 496) 497) 498) 499) 500) 501) 502) 503) 504) 505) 506) 507) 508) 509) 510) 511) 512) 513) 514) 515) 516) 517) 518) 519) 520) 521) 522) 523) 524) 525) 526) 527) 528) 529) 530) 531) 532) 533) 534) 535) 536) 537) 538) 539) 540) 541) 542) 543) 544) 545) 546) 547) 548) 549) 550) 551) 552) 553) 554) 555) 556) 557) 558) 559) 559) 560) 561) 562) 563) 564) 565) 566) 567) 568) 569) 569) 570) 571) 572) 573) 574) 575) 576) 577) 578) 579) 579) 580) 581) 582) 583) 584) 585) 586) 587) 588) 589) 589) 590) 591) 592) 593) 594) 595) 596) 597) 598) 599) 599) 600) 601) 602) 603) 604) 605) 606) 607) 608) 609) 609) 610) 611) 612) 613) 614) 615) 616) 617) 618) 619) 619) 620) 621) 622) 623) 624) 625) 626) 627) 628) 629) 629) 630) 631) 632) 633) 634) 635) 636) 637) 638) 639) 639) 640) 641) 642) 643) 644) 645) 646) 647) 648) 649) 649) 650) 651) 652) 653) 654) 655) 656) 657) 658) 659) 659) 660) 661) 662) 663) 664) 665) 666) 667) 668) 669) 669) 670) 671) 672) 673) 674) 675) 676) 677) 678) 679) 679) 680) 681) 682) 683) 684) 685) 686) 687) 688) 689) 689) 690) 691) 692) 693) 694) 695) 696) 697) 698) 699) 699) 700) 701) 702) 703) 704) 705) 706) 707) 708) 709) 709) 710) 711) 712) 713) 714) 715) 716) 717) 718) 719) 719) 720) 721) 722) 723) 724) 725) 726) 727) 728) 729) 729) 730) 731) 732) 733) 734) 735) 736) 737) 738) 739) 739) 740) 741) 742) 743) 744) 745) 746) 747) 748) 749) 749) 750) 751) 752) 753) 754) 755) 756) 757) 758) 759) 759) 760) 761) 762) 763) 764) 765) 766) 767) 768) 769) 769) 770) 771) 772) 773) 774) 775) 776) 777) 778) 779) 779) 780) 781) 782) 783) 784) 785) 786) 787) 788) 789) 789) 790) 791) 792) 793) 794) 795) 796) 797) 798) 799) 799) 800) 801) 802) 803) 804) 805) 806) 807) 808) 809) 809) 810) 811) 812) 813) 814) 815) 816) 817) 818) 819) 819) 820) 821) 822) 823) 824) 825) 826) 827) 828) 829) 829) 830) 831) 832) 833) 834) 835) 836) 837) 838) 839) 839) 840) 841) 842) 843) 844) 845) 846) 847) 848) 849) 849) 850) 851) 852) 853) 854) 855) 856) 857) 858) 859) 859) 860) 861) 862) 863) 864) 865) 866) 867) 868) 869) 869) 870) 871) 872) 873) 874) 875) 876) 877) 878) 879) 879) 880) 881) 882) 883) 884) 885) 886) 887) 888) 889) 889) 890) 891) 892) 893) 894) 895) 896) 897) 898) 899) 899) 900) 901) 902) 903) 904) 905) 906) 907) 908) 909) 909) 910) 911) 912) 913) 914) 915) 916) 917) 918) 919) 919) 920) 921) 922) 923) 924) 925) 926) 927) 928) 929) 929) 930) 931) 932) 933) 934) 935) 936) 937) 938) 939) 939) 940) 941) 942) 943) 944) 945) 946) 947) 948) 949) 949) 950) 951) 952) 953) 954) 955) 956) 957) 958) 959) 959) 960) 961) 962) 963) 964) 965) 966) 967) 968) 969) 969) 970) 971) 972) 973) 974) 975) 976) 977) 978) 979) 979) 980) 981) 982) 983) 984) 985) 986) 987) 988) 989) 989) 990) 991) 992) 993) 994) 995) 996) 997) 998) 999) 999) 1000) 1001) 1002) 1003) 1004) 1005) 1006) 1007) 1008) 1009) 1009) 1010) 1011) 1012) 1013) 1014) 1015) 1016) 1017) 1018) 1019) 1019) 1020) 1021) 1022) 1023) 1024) 1025) 1026) 1027) 1028) 1029) 1029) 1030) 1031) 1032) 1033) 1034) 1035) 1036) 1037) 1038) 1039) 1039) 1040) 1041) 1042) 1043) 1044) 1045) 1046) 1047) 1048) 1049) 1049) 1050) 1051) 1052) 1053) 1054) 1055) 1056) 1057) 1058) 1059) 1059) 1060) 1061) 1062) 1063) 1064) 1065) 1066) 1067) 1068) 1069) 1069) 1070) 1071) 1072) 1073) 1074) 1075) 1076) 1077) 1078) 1079) 1079) 1080) 1081) 1082) 1083) 1084) 1085) 1086) 1087) 1088) 1089) 1089) 1090) 1091) 1092) 1093) 1094) 1095) 1096) 1097) 1098) 1098) 1099) 1099) 1100) 1101) 1102) 1103) 1104) 1105) 1106) 1107) 1108) 1109) 1109) 1110) 1111) 1112) 1113) 1114) 1115) 1116) 1117) 1118) 1119) 1119) 1120) 1121) 1122) 1123) 1124) 1125) 1126) 1127) 1128) 1129) 1129) 1130) 1131) 1132) 1133) 1134) 1135) 1136) 1137) 1138) 1139) 1139) 1140) 1141) 1142) 1143) 1144) 1145) 1146) 1147) 1148) 1149) 1149) 1150) 1151) 1152) 1153) 1154) 1155) 1156) 1157) 1158) 1159) 1159) 1160) 1161) 1162) 1163) 1164) 1165) 1166) 1167) 1168) 1169) 1169) 1170) 1171) 1172) 1173) 1174) 1175) 1176) 1177) 1178) 1179) 1179) 1180) 1181) 1182) 1183) 1184) 1185) 1186) 1187) 1188) 1189) 1189) 1190) 1191) 1192) 1193) 1194) 1195) 1196) 1197) 1198) 1198) 1199) 1199) 1200) 1201) 1202) 1203) 1204) 1205) 1206) 1207) 1208) 1209) 1209) 1210) 1211) 1212) 1213) 1214) 1215) 1216) 1217) 1218) 1219) 1219) 1220) 1221) 1222) 1223) 1224) 1225) 1226) 1227) 1228) 1229) 1229) 1230) 1231) 1232) 1233) 1234) 1235) 1236) 1237) 1238) 1239) 1239) 1240) 1241) 1242) 1243) 1244) 1245) 1246) 1247) 1248) 1249) 1249) 1250) 1251) 1252) 1253) 1254) 1255) 1256) 1257) 1258) 1259) 1259) 1260) 1261) 1262) 1263) 1264) 1265) 1266) 1267) 1268) 1269) 1269) 1270) 1271) 1272) 1273) 1274) 1275) 1276) 1277) 1278) 1279) 1279) 1280) 1281) 1282) 1283) 1284) 1285) 1286) 1287) 1288) 1289) 1289) 1290) 1291) 1292) 1293) 1294) 1295) 1296) 1297) 1298) 1298) 1299) 1299) 1300) 1301) 1302) 1303) 1304) 1305) 1306) 1307) 1308) 1309) 1309) 1310) 1311) 1312) 1313) 1314) 1315) 1316) 1317) 1318) 1319) 1319) 1320) 1321) 1322) 1323) 1324) 1325) 1326) 1327) 1328) 1329) 1329) 1330) 1331) 1332) 1333) 1334) 1335) 1336) 1337) 1338) 1339) 1339) 1340) 1341) 1342) 1343) 1344) 1345) 1346) 1347) 1348) 1349) 1349) 1350) 1351) 1352) 1353) 1354) 1355) 1356) 1357) 1358) 1359) 1359) 1360) 1361) 1362) 1363) 1364) 1365) 1366) 1367) 1368) 1369) 1369) 1370) 1371) 1372) 1373) 1374) 1375) 1376) 1377) 1378) 1379) 1379) 1380) 1381) 1382) 1383) 1384) 1385) 1386) 1387) 1388) 1389) 1389) 1390) 1391) 1392) 1393) 1394) 1395) 1396) 1397) 1398) 1398) 1399) 1399) 1400) 1401) 1402) 1403) 1404) 1405) 1406) 1407) 1408) 1409) 1409) 1410) 1411) 1412) 1413) 1414) 1415) 1416) 1417) 1418) 1419) 1419) 1420) 1421) 1422) 1423) 1424) 1425) 1426) 1427) 1428) 1429) 1429) 1430) 1431) 1432) 1433) 1434) 1435) 1436) 1437) 1438) 1439) 1439) 1440) 1441) 1442) 1443) 1444) 1445) 1446) 1447) 1448) 1449) 1449) 1450) 1451) 1452) 1453) 1454) 1455) 1456) 1457) 1458) 1459) 1459) 1460) 1461) 1462) 1463) 1464) 1465) 1466) 1467) 1468) 1469) 1469) 1470) 1471) 1472) 1473) 1474) 1475) 1476) 1477) 1478) 1479) 1479) 1480) 1481) 1482) 1483) 1484) 1485) 1486) 1487) 1488) 1489) 1489) 1490) 1491) 1492) 1493) 1494) 1495) 1496) 1497) 1498) 1498) 1499) 1499) 1500) 1501) 1502) 1503) 1504) 1505) 1506) 1507) 1508) 1509) 1509) 1510) 1511) 1512) 1513) 1514) 1515) 1516) 1517) 1518) 1519) 1519) 1520) 1521) 1522) 1523) 1524) 1525) 1526) 1527) 1528) 1529) 1529) 1530) 1531) 1532) 1533) 1534) 1535) 1536) 1537) 1538) 1539) 1539) 1540) 1541) 1542) 1543) 1544) 1545) 1546) 1547) 1548) 1549) 1549) 1550) 1551) 1552) 1553) 1554) 1555) 1556) 1557) 1558) 1559) 1559) 1560) 1561) 1562) 1563) 1564) 1565) 1566) 1567) 1568) 1569) 1569) 1570) 1571) 1572) 1573) 1574) 1575) 1576) 1577) 1578) 1579) 1579) 1580) 1581) 1582) 1583) 1584) 1585) 1586) 1587) 1588) 1589) 1589) 1590) 1591) 1592) 1593) 1594) 1595) 1596) 1597) 1598) 1598) 1599) 1599) 1600) 1601) 1602) 1603) 1604) 1605) 1606) 1607) 1608) 1609) 1609) 1610) 1611) 1612) 1613) 1614) 1615) 1616) 1617) 1618) 1619) 1619) 1620) 1621) 1622) 1623) 1624) 1625) 1626) 1627) 1628) 1629) 1629) 1630) 1631) 1632) 1633) 1634) 1635) 1636) 1637) 1638) 1639) 1639) 1640) 1641) 1642) 1643) 1644) 1645) 1646) 1647) 1648) 1649) 1649) 1650) 1651) 1652) 1653) 1654) 1655) 1656) 1657) 1658) 1659) 1659) 1660) 1661) 1662) 1663) 1664) 1665) 1666) 1667) 1668) 1669) 1669) 1670) 1671) 1672) 1673) 1674) 1675) 1676) 1677) 1678) 1679) 1679) 1680) 1681) 1682) 1683) 1684) 1685) 1686) 1687) 1688) 1689) 1689) 1690) 1691) 1692) 1693) 1694) 1695) 1696) 1697) 1698) 1698) 1699) 1699) 1700) 1701) 1702) 1703) 1704) 1705) 1706) 1707) 1708) 1709) 1709) 1710) 1711) 1712) 1713) 1714) 1715) 1716) 1717) 1718) 1719) 1719) 1720) 1721) 1722) 1723) 1724) 1725) 1726) 1727) 1728) 1729) 1729) 1730) 1731) 1732) 1733) 1734) 1735) 1736) 1737) 1738) 1739) 1739) 1740) 1741) 1742) 1743) 1744) 1745) 1746) 1747) 1748) 1749) 1749) 1750) 1751) 1752) 1753) 1754) 1755) 1756) 1757) 1758) 1759) 1759) 1760) 1761) 1762) 1763) 1764) 1765) 1766) 1767) 1768) 1769) 1769) 1770) 1771) 1772) 1773) 1774) 1775) 1776) 1777) 1778) 1779) 1779) 1780) 1781) 1782) 1783) 1784) 1785) 1786) 1787) 1788) 1789) 1789) 1790) 1791) 1792) 1793) 1794) 1795) 1796) 1797) 1798) 1798) 1799) 1799) 1800) 1801) 1802) 1803) 1804) 1805) 1806) 1807) 1808) 1809) 1809) 1810) 1811) 1812) 1813) 1814) 1815) 1816) 1817) 1818) 1819) 1819) 1820) 1821) 1822) 1823) 1824) 1825) 1826) 1827) 1828) 1829) 1829) 1830) 1831) 1832) 1833) 1834) 1835) 1836) 1837) 1838) 1839) 1839) 1840) 1841) 1842) 1843) 1844) 1845) 1846) 1847) 1848) 1849) 1849) 1850) 1851) 1852) 1853) 1854) 1855) 1856) 1857) 1858) 1859) 1859) 1860) 1861) 1862) 1863) 1864) 1865) 1866) 1867) 1868) 1869) 1869) 1870) 1871) 1872) 1873) 1874) 1875) 1876) 1877) 1878) 1879) 1879) 1880) 1881) 1882) 1883) 1884) 1885) 1886